

Title	アヘン貿易下におけるイギリス人のアヘンに対する価値観の変遷
Author(s)	芝谷, 琉希; 曾根, 壮史
Citation	大阪大学経済学. 2023, 72(4), p. 18-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90774
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【2022年度 学生懸賞論文受賞作 優秀賞要旨】

アヘン貿易下におけるイギリス人のアヘンに対する価値観の変遷

芝谷琉希 曾根壮史

本稿では、19世紀イギリスにおけるアヘンに対する価値観の変遷について明らかにする。アヘンについては、従来、帝国主義の道具としての利用や商品作物としての経済性といった観点から議論されてきた。本稿では、より具体的に、当時のイギリスで実際どのように使用されていたのかに着目する。当時の文献からは、イギリスにおいてアヘンは麻薬として使用された

わけではなく、主に医薬品として利用されていたことがわかる。また、中国に対するアヘン輸出に関しても、議会でのやり取りを見る限り、有害性への認識は必ずしも一般的ではなかった。19世紀初頭に中国への銀流出に対する危惧から植民地化を進めていたインドから対中国アヘン輸出が急拡大するが、アヘンに対する「医薬品である」という認識は罪悪感を薄めていた

と考えられる。19世紀後半になると、知識人を中心にアヘンの有害性が広く認識されるようになるが、庶民レベルでは万能薬として確固たる地位を築いており、その認識は簡単には変わらないものであった。このように、イギリス国内

でのアヘン使用の実態からは、過度に帝国主義批判に傾倒した考え方や、アジアの地域史的な考え方から少し離れた場所から、19世紀イギリスの姿を見ることができるのである。